

【晉紀二十六】 起柔兆困敦，盡玄默敦牂，凡七年。

■東晉、●北魏・代 ▲後燕

(国会図書館デジタルコレクション・「続国訳漢文大成 経子史部」「資治通鑑」第6巻6-232pから参照)

(376年1月1日は壬寅だが、元嘉暦・儀鳳歴では1月2日に当たる。この巻では併記する。なおこの時期はまだ元嘉暦成立以前)

烈宗孝武皇帝上之中太元元年(丙子、376年)

■【帝の元服、親政、謝安は尚書】春，正月，壬寅（1日、元嘉暦2日）朔，帝は元服を加え，皇太后は下詔して政を歸し，復た崇徳太后を稱す。甲辰（3日、元嘉暦4日），大赦して，改元す。丙午（5日、元嘉暦6日），帝は始めて朝に臨む。會稽の内史の^{ちいん}都悺を以て鎮軍大將軍と為し，浙江東五郡（会稽・東陽・臨海・永嘉・新安）諸軍事を都督せしむ。徐州刺史の^{ちいん}桓沖を車騎將軍と為し，豫、江二州之六郡（豫州の歴陽・淮南・廬江・安豊・襄陽、江州の尋陽）諸軍事を都督せしめ，京口より徙りて姑孰に鎮せしむ。謝安は王蘊を以て方伯と為さんと欲し，故に先ず沖の徐州を解く。乙卯（14日、元嘉暦15日），謝安に中書監を加え，尚書事を録さしむ。

前秦【王猛が亡くなって戸惑う苻堅】二月，辛卯（元嘉暦21日），秦王の堅は下詔して曰く、
「朕は王者は賢を求めるに勞し，士を得るに逸す（齊の桓公が管仲を用いるの言）と聞く，斯の言は何ぞ其の驗（証拠）ある也！往に丞相（王猛）を得，常に帝王は為し易しと謂う。丞相の世を違（去る）えてより，鬚髮は中ば白く，（6-233p）一たび之を念う毎に，覺えず酸慟す。今天下に既に丞相無く，或いは政教を淪替（沈淪替廢）せん，侍臣を分け遣わして郡縣を周巡し，民の疾苦を問わしむ可し。」

■三月，秦兵は南郷を寇し，之を抜き，山蠻（襄陽以西の中廬宜城の西山の蠻族）三萬戸は秦に降る。

■夏，五月，甲寅（元嘉暦15日），大赦す。

【前秦は前涼を滅ぼす】

前秦 前涼【張天錫の召還作戰発動】初め，張天錫之張邕を殺す也（101巻升平五年のあり），劉肅及び安定の梁景は皆な功有り，二人は是に由りて寵有り，姓を張氏と賜わり，以て己が子と為し，政事に預ら使む。天錫は酒色に荒れ，庶務に親まず，世子の大懷^{しりぞ}を黜けて而して嬖妾の焦氏之子の大豫を立て，焦氏を以て左夫人と為し，人情は憤怨す。從弟の從事中郎の憲は櫬（柩、命を懸けて）を輿^{にな}いて切諫するも，聽かず。秦王の堅は下詔して曰く、

「張天錫は稱籙して位を受けると雖も，然るに臣道は未だ純ならず，使持節、武衛將軍の武都の^{こうちよう}苟萇、左將軍の毛盛、中書令の梁熙、歩兵校尉の姚萇等を遣わして兵を將いて西河（河西回廊の河という位の意味、一本の河ではない）に臨ましめ，尚書郎の閻負、梁殊をして詔を奉じて天錫を徵して入朝せしむ可し，若し王命に違ふ有れば，即ち師を進めて撲討せよ。」

是の時，秦の歩騎は十三萬，軍司の段鏗は周虓（続による、颺×）に謂って曰く、

「此の衆を以て戦えば，誰か能く之に敵せん！」

虓は曰く、

「戎狄以來，未だ之れ有らざる也。」（周虓は秦に帰属するも、晉朝を尊ぶの心は、寸時も忘れず）

堅は又た秦州刺史の**苟池**、河州刺史の**李辯**、涼州刺史の**王統**に命じて三州之衆を帥いて**苟萇**の後繼と為さしむ。

前秦 **前涼** **張天錫は迎撃態勢を取る** **秋，七月**，**閻負**、**梁殊**は姑臧に至り。**張天錫**は官屬を會して之を謀り、曰く、

「今入朝すれば、必ず返さざらん。如し其の従わざれば、秦兵は必らず至る、將に之を若何せん？」

禁中錄事（張氏の置く官）の**席仿**は曰く、

「愛子を以て質と為し、**賂**うに重寶を以てし、以て其の師を退け、然る後に**徐**に之が計を為さん、此れ屈伸之術也。」

衆は皆な怒りて曰く、

「吾は世々晉朝に事え、忠節は海内に著わる。今一旦身を賊庭に委ねれば、辱は祖宗に及び、醜（続による丑?）は焉より大は莫し！且つ河西は天險にして、百年虞は無く、若し境内の精兵を悉くし、右は西域を招き、北は匈奴を引き、以て之を拒めば、何の**遽**に其の捷たざるを知らん也！」

天錫は袂を攘いて大言して曰く、

「孤の計は決せり矣、降を言う者は斬る！」

閻負、**梁殊**に謂わ使めて曰く、

「君は生きて歸るを欲する乎、死んで歸る乎？」

殊等は氣屈せず、**天錫**は怒り、之を軍門に縛り、軍士に命じて交々之を射さしめて、曰く、

「射て而も中たらざるは、我と心を同じくせざる者也。」

其の母の**嚴氏**は泣いて曰く、

「**秦主**は一州之地を以て、天下を横制（思いのままに制御）せり、東は鮮卑を平らげ、南は巴、蜀を取り、兵は行くを留めざりき、向かう所敵無し。汝が若し之に降れば、猶ほ數年之命を延ばす可し。今萇爾（取るに足らない、微々）たる一隅を以て、大國に抗衡し、又た其の使者を殺せば、亡びるに日無からん矣！」

天錫は龍驤將軍の**馬建**をして衆二萬を帥いて秦を拒ま使む。

前秦 **前涼** **張天錫は敗北して長安に送られる** 秦人は**天錫**が**閻負**、**梁殊**を殺すと聞き、**八月**，**梁熙**、**姚萇**、**王統**、(6-234p) **李辯**は清石津（蘭山道阜蘭県、現・蘭州市阜蘭県）より（黄河を）**濟**り、涼の驍烈將軍の**梁濟**を河會城（湟河と黄河の合流地点）に攻め、之を降す。甲申（元嘉曆15日），**苟萇**は石城津（現・蘭州市阜蘭県）より（黄河を）**濟**り、**梁熙**等と會いて纏縮城を攻め、之を抜く。**馬建**は懼れ、楊非より退いて清塞に屯す。**天錫**は又た征東將軍の**常據**（続による、掌據×、「晉書」の常據が正しい）を遣わして衆三萬を帥いて洪池（嶺名、姑臧の南、甘肅省甘涼道武威県の東南、現・武威市）に軍し、**天錫**は自ら餘衆五萬を將いて、金昌城（甘肅省甘涼道永昌道、現・金昌市永昌県）に軍す。安西將軍の敦煌の**宋皓**は**天錫**に言つて曰く、

「臣は晝は人事を察し、夜は天文を觀るに、秦兵は敵する可からざる也、之に降るに如かず。」

天錫は怒り、**皓**を貶めて宣威護軍と為す。廣武（金城の令居・枝陽を分けて置く）太守の**辛章**は曰く、

「**馬建**は行陳に出でて、必ず國家の用に為さず。」

苟萇は**姚萇**をして甲士三千を帥いて前驅と為す。庚寅（元嘉曆23日），**馬建**は萬人を帥いて迎え降り、餘兵は皆な散り走る。辛卯（元嘉曆24日），**苟萇**及び**常據**は洪池に戦い、**據**の兵は敗れ、馬は亂兵の殺す所と為り、其の屬の**董儒**は之に授けるに馬を以てし、**據**は曰く、

「吾は三たび諸軍を督し、再び節鉞を乗り、八たび禁旅（近衛兵）を將い、十たび外（続は禁）兵を總べ、寵任は極まれり矣。今卒に此に困す、此れは吾之死地也、尚ほ安くに之かん乎！」

乃ち帳に就きて胄を免ぎ、西に向かいて稽首し、劍に伏して而して死す。秦兵は軍司の**席伉**を殺す。癸巳（元嘉暦26日）、秦兵は清塞に入り、**天錫**は司兵（晋の五兵尚書に相当の官）の**趙充哲**を遣わして衆を帥いて之を拒む。秦兵は**充哲**と赤岸（甘肅省蘭山道導河県、現・臨夏回族自治区臨夏県）に戦い、大いに之を破り、俘斬は三萬八千級、**充哲**は死す。**天錫**は城を出でて自ら戦い、城内は又た叛す。**天錫**は數千騎と與に奔りて姑臧に還る。甲午（元嘉暦27日）、秦兵は姑臧に至り、**天錫**は素車白馬にて、面縛して櫬を輿^{にな}い、軍門に降る。**苟萇**は縛を釋き櫬（続による、梓×）を焚き、長安に送る。涼州の郡縣は悉く秦に降る。（惠帝の永寧元年張軌は涼州刺史となり九主75年にして亡びる）

前秦 **前涼** **〔梁熙を涼州刺史、張天錫を歸義侯〕** **九月**、秦王の**堅**は**梁熙**を以て涼州刺史と為し、姑臧に鎮ぜしむ。豪右の七千餘戸を關中に徙し、餘は皆な按堵（安堵）すること故の如し。**天錫**を封じて歸義侯と為し、北部尚書（秦の官名、北蕃を掌る）に拜す。初め、秦兵之出でる也、先ず**天錫**の為に第を長安に築き、至れば則ち之に居らしむ。**天錫**を以て**晉興**（張軌は秦雍の移住者を以て姑臧の西北に郡を置く）太守の隴西の**彭和正**は黃門侍郎と為し、治中從事の武興の**蘇膺**、敦煌太守の**張烈**を尚書郎と為し、西平太守の金城の**趙凝**を金城太守と為し、高昌（漢車師の高昌壁、張氏初めて郡を置く。新疆省迪化道魯番県、現・新疆ウイグル自治区吐魯番市、トルファン、）の**楊干**を高昌太守と為す。餘は皆な才に隨いて擢^{たくじよ}叙す。

前秦 **梁熙**は清儉にして民を愛し、河右は之を安んじ、**天錫**の武威太守の敦煌の**索泮**を以て別駕と為し、**宋皓**を主簿と為す。西平の**郭護**は兵を起こして秦を攻め、**熙**は**皓**を以て折衝將軍と為し、討ちて之を平らぐ。（6-235p）

■ **〔東晋は涼州支援軍を編成するも止める〕** **桓冲**は秦が涼州を攻めるを聞き、兖州刺史の**朱序**、江州刺史の**桓石秀**を遣わして荊州督護の**桓熙**と與に沔、漢を遊軍として、涼州の聲援を為さしむ。又た豫州刺史の**桓伊**を遣わして衆を帥いて壽陽に向かわしめ、淮南太守の**劉波**をして舟を淮、泗に泛べしめ、秦を撓^{たお}めて以て涼を救わんと欲す。涼州の敗没を聞き、皆な兵を罷む。

■ 初め、**哀帝**（101 卷隆和元年にあり）は田租を救じ、畝ごとに二升を収める。乙巳（元嘉暦8日）、田を度^{はか}りて租を収める之制を除き、王公以下、口税米三斛、役に在る之身を蠲^{のぞ}く。

■ **冬**、**十月**、淮北の民を淮南に移す。（秦を畏れる処置）

【苻洛は代を滅ぼす】

前秦 **代** **〔苻洛は劉衛辰を支援して代を攻める〕** **劉衛辰**は代の逼る所と為り、救いを秦に求め、秦王の**堅**は幽州刺史の**行唐公**の**洛**を以て北討大都督と為し、幽、冀の兵十萬を帥いて代を撃たしむ。并州刺史の**俱難**、鎮軍將軍の**鄧羌**、尚書の**趙遷**、**李柔**、前將軍の**朱彤**、前禁將軍の**張蚝**、右禁將軍の**郭慶**をして歩騎二十萬を帥いて、東に和龍に出で、西に上都に出で、皆な**洛**と會さ使めて、**衛辰**を以て郷導と為す。**洛**は、**菁**（苻健が關中に入る時に功有り、苻健没時に逆を以て誅殺せらる）之弟也。

前秦 **代** **〔涼州攻めで遅れた暉等らに、代攻めで功を競わせる〕** **苟萇**之涼州を打つ也、揚武將軍の**馬暉**、建武將軍の**杜周**を遣わして八千騎を帥いて西に恩宿に出で、**張天錫**の走路^{もろ}を邀えしめ、姑臧に會するを期す。**暉**等は澤中を行き、水に値^あいて期を失い、法に於いて應に斬らるるべく、有司は奏す、「獄に降して徴すべし」。

秦王の**堅**は曰く、

「水は春冬に耗竭す。秋夏は盛漲し、此れ乃ち**苟萇**の事を量^{はか}るに宜しきを失うなり、**暉**等の罪に非ず。今

天下は方に有事にして、宜しく過ちを宥して功を責めるべし。暉等に命じて回りて北軍に赴き、索虜（代は鮮卑の索頭種）を撃ち以て自ら贖うべし。」

衆は咸な以為らく萬里に將を召すは、速に應ずる所以に非ずと。堅は曰く、

「暉等は死を免るるを喜び、常事を以て疑う可からざる也。」

暉等（西より回る軍）は果たして倍道して疾驅し、遂に東軍に及ぶ。

■十一月，己巳（1日、元嘉暦では丁酉で、全く合わない）朔，日之を食する有り。（2021-1214）

前秦 代 **〔什翼犍は大敗して逃亡、高車に叛かれる、代の分割統治〕** 代王の什翼犍は白部（鮮卑）、獨孤部（鮮卑）をして南に秦兵を御（統は禦）が使め、皆な勝たず、又た南部大人の劉庫仁をして十萬騎を將いて之を御が使む。庫仁者、衛辰之族、什翼犍之甥也、秦兵と石子嶺（綏遠和林格爾県、現・フフホト市ホリンゴル県）に戦い、庫仁は大敗す。什翼犍は病し、自ら將す能わず、乃ち諸部を帥いて陰山之北に奔る。高車（蒙古北部のトルコ族遊牧民、車輪が高く大なるを以て名とす）の雜種は盡く叛き、四面は寇抄し、芻牧するを得ず、什翼犍は復た漠南を渡る。秦兵は稍く退くと聞き、十二月，什翼犍は雲中に還る。

代 **〔寔君は什翼犍を殺し、代は滅ぶ〕** 初め、什翼犍は國之半を分けて（96 卷成帝咸康四年）以て弟の孤に授け、孤は卒し、子の斤は職を失いて（まだ国の半分を得ず）怨望す。世子の寔（前卷にあり）及び弟の翰は早く卒し、寔の子の珪は尚ほ幼く、（6-236p）慕容妃（什翼犍は秦の女を娶る 97 卷康帝建元二年にあり）之子閼婆、壽鳩、紇根、地干、力真、窟咄は皆な長じ、繼嗣は未だ定まらず。時に秦兵は尚ほ君子津（綏遠特別区域歸綏県、フフホト市玉泉区、黄河の東岸）に在り、諸子は毎夜兵を執りて警衛す。斤は因りて什翼犍之庶長子の寔君を説きて曰く、「王は將に慕容妃之子を立てんとし、先ず汝を殺さんと欲す、故に頃來（近頃）諸子は毎夜戎服して、兵を以て廬帳（天幕）を繞る、便を伺いて將に發せんとする耳。」

寔君は之を信じ、遂に諸弟を殺し、並（統は并）びに什翼犍を弑す。是の夜、諸子婦及び部人は奔りて秦の軍に告げ、秦の李柔、張蚝は兵を勒して雲中に趨く。部衆は逃げ潰え、國中は大亂す。珪之母の賀氏は珪を以て走りて賀訥に依る。訥は、野干（前卷簡文帝咸安元年にあり）之子也。秦王の堅は代の長史の燕鳳を召して、代（統は其）の亂れる所以の故を問い、鳳は具に狀を以て對える。堅は曰く、

「天下之惡は一也。」

乃ち寔君及び斤を執りて、長安に至り、之を車裂きにす。堅は珪を長安に遷さんと欲し、鳳は固く請いて曰く、

「代王は初めて亡し、群下は叛き散り、遺孫の冲は幼にして、相い統攝するもの莫し。其の別部大人の劉庫仁は、勇に而して智有り。鐵弗衛辰（劉衛辰は元々鐵弗種）は、狡猾にして變多く、皆な獨り任ず可からず。宜しく諸部を分けて二と為し、此の兩人をして之を統べ令むべし。兩人は素より深き仇（統は讐）有り、其の勢いは敢えて先ず發する莫し。其の孫の稍長ずるを俟ちて、引いて而して之を立てれば、是れ陛下は亡を存し絶を繼ぐ之徳を代に有し、其の子子孫孫をして永く不侵不叛之臣と為ら使めん、此れは安邊之良策也。」

堅は之に従い、代民を分けて二部と為し、河より以東は庫仁に屬し、河より以西は衛辰に屬し、各々官爵を拜し、其の衆を統べ使む。賀氏は珪を以て獨孤部に歸し、南部大人の長孫嵩（始め拓跋鬱律は沙漠雄と什翼犍を生む。沙漠雄は名を仁と変え拓跋と号す。道武は嵩が宗室の長なるを以て長孫氏とす）、元佗等と皆な庫仁に依る。行唐公の洛は什翼犍の子の窟咄が年長を以て、之を長安に遷す。堅は窟咄をして太學に入れ讀書せ使む。

【前秦は東西拡大するも、戦乱に倦む】

前秦 **【東西の戦役勝利宣言】** 下詔して曰く、

「張天錫は祖父之資を承け、百年之業に藉り、命を河右に^{ほしいまま}擅にし、偏隅に叛換（跋扈）す。索頭は世々朔北に跨がり、區域を中分し、東は濊（穢×、濊貊はツングース系種族）貊を賓し、西は烏孫を引き、控弦して百萬、雲中に虎視する。爰に兩師（^{こご}苟萇が河西を伐つ帥、洛が代を伐つ帥）に命じ、分けて^{かつりよ}黠虜（悪賢い虜）を討ち、役は歳に^{わた}淹らず、二凶を^{きゅうてん}窮殄し、俘降は百萬、土を^{ひら}闢くこと九千、五帝之未だ賓せざる所、周、漢之未だ至らざる所、譯（通訳）を重ねて來王し、風を^{なつかし}懷みて職に率わざるは莫し。有司は速かに功を班し爵を授（受×）ける可し、戎士は悉く之を復すること五歳、爵三級を賜わるべし。」

是に於いて行唐公の洛に征西將軍を加え、鄧羌を以て并州刺史と為す。

前秦 **【戦乱の中、旧燕の勢力は機を待つ】** 陽平國の常侍の慕容紹は私かに其の兄の楷に謂って曰く、

「秦は其の強大を恃んで、勝ちを務めること休まず、北に雲中に戍し、南に蜀、漢を守り、轉運は萬里にして、道殣（道路の餓死者）は相い望む。兵は外に疲れ、（6-237p）民は内に困し、危亡は近きかな矣。冠軍（冠軍將軍の慕容垂）叔父（叔仁×、楷紹の叔父）の智度は英拔なり、必ず能く燕の祚を恢復せん、吾が屬は但だ當に身を愛して以て時を待つ耳！」

前秦 **【西の氐羌を慰撫して、河西の流寓を還るを許す】** 初め、秦人の既に涼州に克ち、西障（西の辺境）の氐、羌を討たんと議す。秦王の堅は曰く、

「彼の種落は雜居し、相い統壹せず、中國に大患を為す能わず。宜しく先ず撫諭し、其の租税を徴せん。若し命に従わざれば、然る後に之を討つべし。」

乃ち殿中將軍の張句をして前に行きて宣慰せ使め、庭中將軍（秦の置く官）の魏曷飛をして騎二萬七千を帥いて之に隨わしむ。曷飛は其の險を恃みて服せざるを忿り、兵を縦ちて之を撃つ、大いに掠めて而して歸る。堅は其の命に違うを怒り、之に鞭つこと二百、前鋒督護の儲安を斬り以て氐、羌に謝す。氐、羌は大いに悦び、降附貢獻する者は八萬三千餘落となる。雍州の士族の先に亂に因りて河西に流寓する者は、皆な本に還るを聽す。

● **【劉庫仁は拓跋珪に期待をかけて養育】** 劉庫仁は分（^{あら}統には無し）けて離散を招撫し、恩信は甚だ著わり、拓跋珪に奉事すること恩勤周備にして、廢興を以て意を易えず、常に諸子に謂って曰く、

「此の兒は天下に高き之志有り、必ず能く祖業を恢隆（回復隆盛）し、汝曹は當に謹んで之を遇すべし。」

秦王の堅は其の功を賞し、廣武將軍を加え、幢麾鼓蓋を給す。

前秦 **【劉衛辰の反乱、後に許す】** 劉衛辰は庫仁之下に在るを恥じ、怒りて、秦の五原（現・バヤンノール市五原県）太守を殺して而して叛す。庫仁は衛辰を撃ち、之を破り、追いて陰山の西北千餘里に至り、其の妻子を獲る。又た西に庫狄部を撃ち、其の部落を徙し、之を桑干川（^{あら}統は桑乾川、山西省馬邑県から東流する白河上流、馬邑県は現・朔州市）に置く。之久しく、堅は衛辰を以て西單于と為し、河西の雜類を督攝し、代來城（北河の西）に屯せしむ。

西秦前身 是の歳、乞伏司繁は卒し、子の國仁は立つ。

烈宗孝武皇帝上之中太元二年（丁丑，377年）

前秦 **高句麗** **新羅** **〔王猛没後の前秦はようやく頽廢の度を増す〕** **春**、高句麗、新羅、西南夷は皆な遣使して秦に入貢す。趙の故の將作功曹の熊邈^{ゆうぼく}は屢々秦王の堅の為に石氏の宮室器玩之盛んなるを言い、堅は邈を以て將作長史（秦の官）と為し、尚方丞を領せしめ、大いに舟艦、兵器を修め、飾るに金銀を以て、頗る精巧を極める。慕容農は私かに慕容垂に言つて曰く、

「王猛之死せるより、秦之法制は、日々に以て頽靡し、今は又た之に重ねて奢侈を以てし、殃^{わざわい}は將に至らんとす矣、圖讖之言に、行くすえは當に驗有らん。大王は宜しく英傑に結納して以て天意を承け、時を失う可からざる也！」

垂は笑いて曰く、

「天下の事は爾^{なんじ}が及ぶ所に非ざるなり。」

【謝安と謝玄の活躍】

■桓豁^{かんかつ}は兖州刺史の朱序を表して梁州刺史と為し、襄陽に鎮せしむ。

■**秋**、**七月**、丁未（元嘉暦15日）、尚書僕射の謝安を以て司徒と為し、安は讓りて拜せず。復た侍中、都督揚、豫、徐、兗、青五州諸軍事を加える。

■**〔謝安・謝玄・桓沖・王蘊らの政治体制〕** 丙辰（24日）、征西大將軍、荊州刺史の桓豁は卒す。**冬**、**十月**、辛丑（11日）、桓沖を以て都督江、荊、梁、益、寧、交、廣七州諸軍事とし、（6-238p）荊州刺史を領せしむ。沖の子の嗣を以て江州刺史と為す。又た五兵尚書の王蘊を以て都督江南諸軍事（晉陵の諸軍）とし、節を假し（統は無し）、徐州刺史を領せしむ。征西司馬（桓豁は征西將軍、玄を司馬にする）の領南郡相の謝玄を兖州刺史と為し、廣陵相を領し、江北の諸軍事を監ぜしむ。桓沖は秦人の強盛なるを以て、移りて江南に阻せんと欲し、奏して江陵より徙りて上明（湖北省荊南道松滋縣、現・荊州市松滋市）に鎮し、冠軍將軍の劉波をして江陵を守らしめ、咨議參軍の楊亮をして江夏を守らしむ。王蘊は固く徐州を讓り、謝安は曰く、
「卿は後の父之重きに居り、應に妄りに自ら菲薄し、以て時遇（一時の恩遇）を虧くべからず。」

蘊は乃ち命を受ける。

■**〔謝玄は劉牢之などを擁し、北府兵という〕** 初め、中書郎の郗超^{ちちよう}（徐兖二州刺史から会稽に鎮す）は自ら其の父の愔の位遇は應に謝安之右に在るを以て、而して安が入りて機權を掌り、愔は散地に優遊す、常に憤邑して辭色に形となし、是に由りて謝氏と隙有り。是の時朝廷は方に秦寇を以て憂と為し、詔して文武の良將の以て北方を鎮御す可き者を求め、謝安は兄の子の玄を以て詔に應ず。超は之を聞き、歎じて曰く、
「安之明は、乃ち能く衆に違いて親を擧げる。玄之才は、以て擧げる所に負かざるに足る。」

衆は咸な以て然らずと為す。超は曰く、

「吾は嘗て玄と共に桓公（桓溫も101巻に同僚の記事あり）の府に在り、其の才を使うを見るに、履屐（皮靴木靴）の間と雖も未だ嘗て其の任を得られざればあらず、是く以て之を知るなり。」

玄は驍勇之士を募り、彭城の劉牢之等數人を得る。牢之を以て參軍と為し、常に精銳を領して前鋒と為し、戦いは捷たざる無し。時に

「北府（晉人は京口を呼ぶ）兵」

と號しと、敵人は之を畏れる。

■**〔王彪之は謝安に宮室の増修を終に許さず〕** 壬寅（元嘉暦12日）、護軍將軍、散騎常侍の王彪之は卒す。初め、謝安は宮室を増修せんと欲し、彪之は曰く、

「中興之初め、東府（建康臺城の東）に即きて宮と為し、殊に儉陋と為す。蘇峻之亂に、成帝は蘭台（御史台）

の都坐（御史台の官の会坐）に止まり、殆んど寒暑を蔽わず、是を以て更に新宮（94 卷成帝咸和五年にあり）を營む。之を漢、魏に比すれば則ち儉と為し、之を初めて江に過ぎるに比すれば則ち侈と為す矣。今寇敵は方に強く、豈に大いに功役を興こし、百姓を勞擾する可き邪！」

安は曰く、

「宮室は弊陋ならば、後世（続は人）人は能無しと謂わん。」

彪之は曰く、

「凡そ天下之重きに任ずる者は、當に國を保ち家を寧んじ、政事を緝熙（しゅうき）（つむぎ広める）すべし、乃ち室（続は室屋）を修めるを以て能と為さん邪？」

安は其の議を奪う能わず、故に彪之之世を終るまで、營造する所無し。

■十二月，臨海（会稽東部都尉の治、孫亮の太平二年に臨海郡を立てる）太守の郗超は卒す。初め、超は桓氏に黨し、父の愔が王室に忠なるを以て、之を知ら令めず。病の甚しきに及び、一箱の書を出して門生に授けて曰く、

「公は年尊し（老年）、我の死する之後、若し哀惋を以て寢食を害せん者、此の箱を呈す可し。爾らずんば、（6-239p）即ち之を焚くべし。」

既に而して愔は果たして哀惋して疾を成し、門生は箱を呈す、皆な桓溫と往反（往復）する密計なり。愔は大いに怒りて曰く、

「小子は死すること已に晩し矣！」

遂に復た哭さず。

烈宗孝武皇帝上之中太元三年（戊寅，378年）

【前秦は大挙して襄陽・澎城に押し寄せる】

■春，二月，乙巳（元嘉暦17日）、新宮を作り、帝は移りて會稽王の邸に居る。

前秦■[秦軍は大挙して襄陽を攻める、夫人城の善戦] 秦王の堅は征南大將軍、都督征討諸軍事、守尚書令の長樂公の丕、武衛將軍の苟萇、尚書の慕容暉を遣わして歩騎七萬を帥いて襄陽を寇せしめ、荊州刺史の楊安を以て樊、鄧之衆を帥いて前鋒と為し、征虜將軍の始平の石越をして精騎一萬を帥いて魯陽關（河南省河洛道魯山県の西南、現・平頂山市魯山県）を出でしめ、京兆尹の慕容垂、揚武將軍の姚萇をして衆五萬を帥いて南郷に出でしめ、領軍將軍の苟池、右將軍の毛當、強弩將軍の王顯をして衆四萬を帥いて武當に出でしめ、會して襄陽を攻めんとす。夏，四月，秦兵は沔北に至り、梁州刺史の朱序は秦の舟楫無きを以て、以て虞いと為さず。既に而して石越は騎五千を帥いて浮いて漢水を渡り、序は惶駭し、固く中城を守る。越は其の外郭に克ち、船百餘艘を獲りて以て餘の軍を濟す。長樂公の丕は諸將を督して中城を攻める。序の母の韓氏は秦兵の將に至らんとするを聞き、自ら城に登りて履行し、西北の隅に至り、固からずと以て為し、百餘の婢及び城中の女丁を帥いて邪城を其の内に築く。秦兵の至るに及び、西北の隅は果たして潰え、衆は移りて新城を守り、襄陽人は之を夫人城と謂う。桓沖は上明に在り、衆七萬を擁すも、秦兵之強きを憚り、敢えて進まず。丕は急に襄陽を攻めんと欲し、苟萇は曰く、

「吾が衆は敵に十倍する、糗糧は山積し、但だ稍く漢、沔之民を許、洛に遷し、其の運道を塞ぎ、其の援兵を絶てば、譬えば網中之禽の如く、何の獲らさせるを患えん。而るに多く將士を殺し、急に成功を求

めん哉！」

丕は之に従わず。慕容垂は南陽を抜き、太守の鄭裔を執り、丕と襄陽に會す。

■秋，七月，新宮は成る。辛巳（元嘉曆25日），帝は入りて之に居す。

前秦 **〔秦軍は彭城、淮陰、盱眙を攻める〕** 秦の兗州刺史の彭超は沛郡太守の遼を彭城に攻めるを請い、且つ曰く、

「願わくは更に重將を遣わして淮南の諸城を攻め、征南（苻丕）の棋劫（囲碁の却、右を攻めれば左を襲う、兵勢のとえ）之勢いを為せ、東西は並（続は竝）び進めば、丹楊（建康は丹陽秣陵県にある）は平らげるに足らざらん也。」秦王の堅は之に従い、都督東討諸軍事、後將軍の俱難、右禁將軍の毛盛、洛州刺史の邵保をして歩騎七萬を帥いて淮陽（晉書載記には淮陰、これに従うべし）、盱眙を寇せ使む。超は、越之弟、保は、羌（邵羌は101卷海西公太和二年にあり）之從弟也。八月，彭超は彭城を攻め、右將軍の毛虎生に詔して衆五萬を帥いて姑孰に鎮せしめ以て秦兵を御がしむ。秦の梁州刺史の韋鐘は魏興太守の吉挹を西城（陝西省關中道安康県の西北、漢中郡のち魏興郡、現・安康市）に圍む。

前秦 **〔痛飲宴会の戒め〕** 九月，秦王の堅は群臣と飲酒し、秘書監の朱彤^{しゅゆう}を以て正（酒正、監督者）と為し、人人に命じて極醉を以て限りと為す。（6-240p）秘書侍郎の趙整は《酒德之歌》を作りて曰く、

「地は酒泉（郡）を列し、天は酒池（酒旗に作るべし、星の名）を垂れる、杜康（古の造酒者）は妙に識り、儀狄（酒を作りて禹に進める人）は先ず知る。紂は殷邦^{ほう}を喪^{ほろぼ}し、桀は夏國を傾け、此に由りて之を言え、前の危きは後の則^{のり}なり。」（前人の失敗は後の人の則となる）

堅は大いに悦び、整に命じて之を書して以て酒戒と為す、是より群臣を宴するに、禮飲（臣が君主と宴するには三爵に過ぎずの礼）して而して已む。

前秦 **〔大宛は汗血馬を返す〕** 秦の涼州刺史の梁熙は遣使して西域に入り、秦の威德を揚げる。冬，十月，大宛は汗血馬を獻じる。秦王の堅は曰く、

「吾は嘗って漢の文帝（千里の馬を返す故事、13卷元年にあり）之人と為りを慕い、千里の馬を用いて何をか為さん！」

群臣に命じて作《止馬之詩》を作り而して之を反す。

■巴西人の趙寶は兵を梁州に起こして、自ら晉の西蠻校尉、巴郡太守を稱す。

前秦 **〔北海公の重の謀反を許す〕** 秦の豫州刺史の北海公の重は洛陽に鎮し、反を謀る。秦王の堅は曰く、「長史の呂光は忠正なり、必ず之と同じからず。」

即ち光に命じて重を收め、檻車をもって長安に送り、之を赦し、公を以て第に就かしむ。重は、洛之兄也。

前秦 **〔丕等襄陽攻略軍を切讓し、期限を切る〕** 十二月，秦の御史中丞の李柔は劾奏す、

「長樂公の丕等は衆十萬を擁し、小城を攻圍し、日々に萬金を費し、久しく而して效無し、請う微して廷尉に下さん。」

秦王の堅は曰く、

「丕等は廣費（浪費）して成無く、實に宜しく貶戮すべし。但だ師は已に時を淹^{わた}り、虚しく返す可からず、其の特に之を原^{ゆる}し、成功を以て罪を贖わ令めん。」

黃門侍郎の韋華をして節を持して丕等を切讓せ使め、丕に劍を賜りて曰く、

「來春捷たざれば、汝は自裁す可し、復た面を持して吾を見る勿かれ也！」

前秦 周虓は秦に在り、密かに桓沖に書を與え、秦の陰計を言う。又た逃げて漢中に奔り、秦人は獲り而し

て之を赦す。

烈宗孝武皇帝上之中太元四年（己卯，379年）

■春，正月，辛酉（元嘉曆8日），大赦す。

前秦〔苻堅自ら襄陽に征するを諫めて止む〕秦の長樂公の丕等は詔を得て惶恐し，乃ち諸軍に命じて力を並（続は并）せて襄陽を力攻めしむ。秦王の堅は自ら將して襄陽を攻めんと欲し，詔して陽平公の融をして關東六州之兵を以て壽春に會さしめ，梁熙をして河西之兵を以て後繼為さしめんとす。陽平公の融は諫めて曰く、

「陛下は江南を取らんと欲す，固より當に博く謀り熟慮すべし，倉猝にす可からず。若し止だ襄陽を取るのみならば，又た豈に親ら大駕を勞するに足らん乎？未だ天下之衆を動かし而して一城の為にする者有らず，所謂いわゆる隨侯之珠を以て千仞之雀を彈ずる也（呉氏春秋に言う、世は必ず笑わん。隨公の珠は、隨公が大蛇の傷つくを助けて、大蛇が報いて獻じる夜光の珠）。」

梁熙は諫めて曰く、

「晉主之暴は，未だ孫皓（三国の呉の最後の王）の如くならず，江山は險固にして，守るに易く攻めるに難し。陛下は必ず江表を廓清せんと欲せば，(6-241p)亦た將帥に分命して，關東之兵を引き，南に淮、泗に臨み，梁、益之卒を下し，東に巴、峽を出でしむに過ぎず，又た何をか必ずしも親ららんろ驚駭を屈し，遠く沮澤（濕った沢）に幸せん乎？昔漢の光武は（岑彭・呉漢を用いて）公孫述を誅し，晉の武帝は（王濬・王渾を用いて）孫皓を擒にす，未だ二帝の自ら六師を統べ，親ら枹鼓を執り，矢石を蒙るを聞かざる也。」

堅は乃ち止む。

前秦■〔襄陽は終に陥落し、朱序は捕われる〕詔して冠軍將軍の南郡相の劉波をして衆八千を帥いて襄陽を救わしめ，波は秦を畏れ，敢えて進まず。朱序は屢々出でて戦い，秦兵を破り，引いて退きて稍遠く，序は備えを設けず。二月，襄陽の督護の李伯護は密かに其の子を遣わして款を秦に送り，内應を為さんと請う。長樂公の丕は諸軍に命じて進みて攻めしむ。戊午（元嘉曆34日？、戊子なら5日），襄陽に克ち，朱序を執り，長安に送る。秦王の堅は序の能く節を守るを以て，度支尚書に拜す。李伯護を以て不忠と為し，之を斬る。

前秦秦の將軍の慕容越は順陽（河南省汝陽道鄧、現・南陽市鄧州市）を拔き，太守の譙國の丁穆を執る。堅は之を官にせんと欲し，穆は固辭して受けず。堅は中壘將軍の梁成を以て荊州刺史と為し，兵一萬を配し，襄陽に鎮ぜしめ，其の才望を選び，禮して之を用いる。

■桓沖は襄陽の陷没するを以て，上疏して章節（印）を送り，職を解くを請う。許さず。詔して劉波の官を免じ，俄に復た以て冠軍將軍と為す。

前秦秦は前將軍の張蚝を以て并州刺史と為す。

■〔田泓は沒水潛行するも捕まる、彭城の陥落〕兗州刺史の謝玄は衆萬餘を帥いて彭城を救い，泗口に軍し，間使を遣わしてたいとん戴逵に報ぜんと欲すも而るに得る可からず。部曲の將の田泓は沒水潛行して彭城に趣くを請い，玄は之を遣る。泓は秦人の獲る所と為り，（秦人は）厚く之に賂して，「南軍は已に敗れたり」

と雲(続は云)わ使む。。泓は偽りて之を許し、既に而して城中に告げて曰く、

「南軍は至るに垂々とし、我は單行して來報す、賊の得る所と為る。之を勉めよ！」

秦人は之を殺す。彭超は輜重を留城(澎城郡の留京城、江蘇省徐海道沛県東南、現・徐州市沛県)に置き、謝玄は聲を揚げ後軍將軍の東海の何謙を遣わして留城に向かわしむ。超は之を聞き、彭城の圍みを釋き、兵を引いて還りて輜重を保つ。戴逵は彭城之衆を帥いて、謙を隨えて玄に奔り、超は遂に彭城に據り、兗州治中の徐褒を留めて之を守らしめ、南に盱眙を攻める。俱難は淮陰に克ち、邵保を留めて之を成らしむ。

■「諸経費の削減」三月，壬戌（元嘉暦10日），詔して以てす

「疆場(国境地帯)は虞い多く、年穀は登らず、其の供御の須いる所、事は儉約に従う。九親(九族)の供給は、衆官の廩俸は、權に半ば減ず可し。凡そ諸々の役費は、軍國の事要に非ざるよりは、皆な宜しく停省すべし。」

■「巴蜀での戦い、呂光の活躍」癸未（元嘉暦31日），右將軍の毛虎生をして衆三萬を帥いて巴中(巴郡)を撃ち、以て魏興を救わ使む。前鋒督護の趙福等は巴西に至り、秦將の張紹等の敗る所と為り、七千餘人を亡う。虎生は退きて巴東に屯す。蜀人の李烏は衆二萬を聚め、成都を圍み以て虎生に應じ、秦王の堅は破虜將軍(秦の置く官)の呂光をして撃ちて之を滅さ使む。(6-242p)

前秦「苻堅は晉の忠臣の多きに感嘆」夏，四月，戊申（元嘉暦26日），韋鐘は魏興を抜き、吉挹は刀を引いて自殺せんと欲し、左右は其の刀を奪う。會々秦人は至り、之を執り、挹は言わず食わず而して死す。秦王の堅は歎じて曰く、

「周孟威(周虓の字)前に屈せず、丁彦遠(丁穆の字)は後に己に潔くし、吉祖沖(吉挹の字)は口を閉ざして而して死す、何ぞ晉氏之忠臣の多き也！」

挹の參軍の史穎は逃げて歸り、挹の臨終の手疏を得、詔して益州刺史に贈る。

前秦■「秦軍は廣陵百里に迫り、建康は震撼す」秦の毛當、王顯は衆二萬を帥いて襄陽より東に俱難、彭超に會して淮南を攻める。五月，乙丑（元嘉暦14日），難、超は盱眙を抜き、高密(僞国なり、盱眙に鎮す)の内史の毛璪之を執る。秦兵六萬は幽州(僞国で江北に置く)刺史の田洛を三阿(江蘇省淮揚道寶應県、現・揚州市宝应県)に圍み、廣陵を去ること百里。朝廷は大いに震え、江に臨みて戍を列し、征虜將軍の謝石を遣わして舟師を帥いて塗中に屯す。石は、安之弟也。

■「謝玄らは大反撃して盱眙を取る」右衛將軍の毛安之等は衆四萬を帥いて堂邑に屯す。秦の毛當、毛盛は騎二萬を帥いて堂邑を襲い、安之等は驚き潰える。兗州刺史の謝玄は廣陵より三阿を救う。丙子（元嘉暦25日），難、超は戦いて敗れ、退きて盱眙を保つ。六月，戊子（元嘉暦7日），玄は田洛と衆五萬を帥いて進みて盱眙を攻め、難、超は又た敗れ、退きて淮陰に屯す。玄は何謙等を遣わして舟師を帥いて潮に乗りて而して上らしめ、夜、淮橋(秦は淮水に橋を架ける)を焚く。邵保は戦死し、難、超は退きて淮北に屯し、玄は何謙、戴逵、田洛と共に之を追い、君川(安徽省淮泗道盱眙県の北に君山有り、現・淮安市盱眙県)に戦い、復た大いに之を破り、難、超は北に走り、僅かに身を以て免る。謝玄は廣陵に還り、詔して號を冠軍將軍に進め、領徐州刺史を加える。

前秦秦王の堅は之を聞き、大いに怒る。秋，七月，檻車で超を徵して廷尉に下し、超は自殺す。難は爵を削りて民と為す。毛當を以て徐州刺史と為し、彭城に鎮ぜしむ。毛盛を兗州刺史と為し、胡陸(湖陵、山東

省濟寧道魚臺県、現・濟寧市魚台県）に鎮ぜしむ；王顯を揚州刺史と為し、下邳に戍せしむ。

■**〔謝安の名声大いに高まる〕**謝安を宰相と為し、秦人は屢々入寇し、邊兵は利を失い、衆心は危懼し（続は無し）、安は毎に之を鎮めるに、和靜を以てす。其の政を為すや、務めて大綱を挙げ、小察を為さず。時の人は安を王導に比し、而して其の文雅は之に過ぎたりと謂う。

■**八月**，丁亥（元嘉曆7日），左將軍の王蘊を以て尚書僕射と為し、之頃^{しばらく}して、丹楊尹に遷す。蘊は自ら國姻（外戚）を以て、内に在るを欲せず、苦^{ねんご}ろに外に出んことを求める。復た以て都督浙江東五郡諸軍事、會稽内史と為す。

前秦是の歲，秦は大いに饑える。

烈宗孝武皇帝上之中太元五年（庚辰，380年）

前秦春，**正月**，秦王の堅は復た北海公の重を以て鎮北大將軍と為し、薊に鎮せしむ。

前秦〔諸將に大学で兵法講義するのを、朱彤が諫止す〕**二月**，教武堂を渭城（咸陽）に作り、太學生の陰陽兵法に明らかなる者に命じて諸將に教授せしむ。（6-243p）秘書監の朱彤は諫めて曰く、

「陛下は東征西伐して、向かう所敵無く、四海之地は、什に其の八を得る、江南は未だ服さずと雖も、蓋し言うに足らず、是れ宜しく稍^{ようや}く武事を偃とめ、文德を増修すべし。乃ち更に始めて學舎を立て、人に戰鬥之術を教えるは、殆んど昇平を馴致する所以に非ざる也。且つ諸將は皆な百戰之餘なりて、何の兵に習わざるを患えん、而るに更に（諸將をして）教えを書生に受け使むは、其の志氣を強くする所以に非ざる也。此れ實に益無く而して名を損する有り、惟だ陛下之を圖るべし！」

堅は乃ち止む。

【苻洛の反乱は鎮圧される、休忍も関係する】

前秦〔前秦の苻洛は東土を挙げて反乱〕秦の征北將軍、幽州刺史の行唐公の洛は、勇にして而して多力、能く坐して牛の奔るを制し、射て犁耳（鋤の耳は分厚い）^{つらぬ}を洞く。（前年）自ら代を滅ぼす之功有るを以て、開府儀同三司を求め、得ず、是に由りて怨憤す。**三月**，秦王の堅は洛を以て使持節、都督益、寧、西南夷諸軍事、征南大將軍、益州牧と為し、伊闕より襄陽に趨き、漢（水）を溯（続は派）りて而して上ら使む。洛は官屬に謂って曰く、

「孤は、帝室の至親（苻堅の兄の子）なり、入りて將相と為るを得ず、而して常に邊鄙^{へんび ひんき}に擯棄せられる。今又た之を西裔に投じ、復た京師を過ぎるを聽さず、此くは必ず陰かに計有らん、梁成（襄陽にあり）をして孤を漢水に沉め使めんと欲する耳。諸君の意は何如や？（続は欠如）」

幽州の治中の平規は曰く、

「逆に取りて順に守るは、湯、武是れ也。禍いに因りて福と為すは、桓（齊の桓公）、文（晉の文公）是れ也。主上は昏暴為らずと雖も、然れど兵を窮め武を黷^{けが}し、民の肩を息^{やす}む所有るを思う者は、十室にして而して九。若し明公の神旗一たび建てば、必ず率土は雲のごとく従わん。今全燕に跨據し、地は東海を盡くし、北は烏桓、鮮卑を總べ、東は句麗、百濟を引きて、控弦之士は五十餘萬に減ぜず、奈何して手を束ねて徴に就き、不測之禍いを蹈まん乎！」

洛は袂を攘げて大言して曰く、

「孤の計は決す矣、謀を沮む者は斬らん！」

是に於いて自ら大將軍、大都督、秦王と稱す。平規を以て幽州刺史と為し、玄菟太守の吉貞を左長史と為し、遼東太守の趙贊を左司馬と為し、昌黎太守の王縉^{おううん}（王蘊×）を右司馬と為し、遼西太守の王琳、北平太守の皇甫傑、牧官都尉の魏敷等を從事中郎と為す。使者を分遣し兵を鮮卑、烏桓、高句麗、百濟、新羅、休忍の諸國に徴し、兵三萬を遣わして北海公の重を助けて薊を成らしむ。諸國は皆な曰く、

「吾は天子の為に藩を守る、行唐公に従いて逆を為す能わず。」

洛は懼れ、止まらんと欲し、猶豫して決せず。王縉^{王縉}（王縉×）、王琳、皇甫傑、魏敷は其の成る無きを知り、之を告げんと欲す。洛は皆な之を殺す。吉貞、趙贊は曰く、

「今諸國は従わず、事は本圖（本来の計画）に乖^{そむ}く。明公は若し益州之行を憚^はる者、當に遣使して表を奉じて留まるを乞うべし、主上も亦た従わざるを慮らず。」

平規は曰く、

「今事は形として頗^{（続は已）}る露われ、何ぞ中止す可きや！宜しく詔を受けると聲言し、幽州之兵を盡くし、南して常山に出でれば、陽平公は必ず郊に迎えん。因りて而して之を執り、進みて冀州（陽平公融は冀州牧）に據り、關東之衆を總べて以て西土を圖れば、天下は指麾して而して定まる可し也。」

洛は之に従う。夏，四月，洛は衆七萬を帥いて和龍（現・朝陽市）を發す。（6-244p）

前秦〔苻堅はついに討伐軍を編成す〕秦王の堅は群臣を召して之を謀り、歩兵校尉の呂光は曰く、

「行唐公は至親を以て逆を為す、此くは天下の共に疾^{にく}む所なり。願わくは臣に歩騎五萬を假し、之を取らんこと遺^おちたるを拾うが如き耳。」

堅は曰く、

「重、洛の兄弟は、東北の一隅に據り、兵賦は全資あり、未だ輕んず可からざる也。」

光は曰く、

「彼の衆は凶威に迫られ、一時に蟻聚する耳。若し大軍を以て之に臨めば、勢いは必ず瓦解すべし、憂うるに足らざる也。」

堅は乃ち遣使して洛を讓^せめ、和龍に還ら使め、

「當に幽州を以て永く世々封と為すべし。」

洛は使者に謂って曰く、

「汝は還りて東海王（苻堅は以前東海王）に白^{もう}せ、幽州は偏狹なり、以て萬乘を容れるに足らず、須^{すべから}く秦中に王となり以て高祖（苻健）之業を承くべし。若し能く駕を潼關に迎える者は、當に位は上公と為し、爵は本國に歸らしむべし。」

堅は怒り、左將軍の武都の竇沖及び呂光を遣わして歩騎四萬を帥いて之を討たしむ。右將軍の都貴をして傳を馳せて鄴に詣らしめ、冀州の兵三萬を將いて前鋒と為す。陽平公の融を以て征討大都督と為す。

前秦〔苻洛は苻堅に敗れるも、誅さず、涼州之西海郡に流される〕北海公の重は薊城之衆を悉くして洛と會し、中山に屯し、衆は十萬有り。五月，竇沖等は洛と中山に於いて戦い、洛の兵は大いに敗れ、洛を生きて擒とし、長安に送る。北海公の重は走りて薊に還り、呂光は追いて之を斬る。屯騎校尉の石越は東萊より騎一萬を帥いて、海に浮かびて和龍を襲い、平規を斬り、幽州は悉く平らぐ。堅は洛を赦して誅さず、涼州之西海郡に従す。（西海郡は酒泉の西北、漢獻帝興平二年に置く、現・内モンゴル自治区阿拉善盟額濟納旗達来呼布爾ガス鎮、郡治は居延県、ガシュンノール南東の沙漠の中）

前秦 **【功有るも賞せず，罪有りて誅さずが苻堅の失敗原因】** 臣光曰く、夫れ功有るも賞せず，罪有りて誅さず，堯、舜と雖も治を為す能わず，況んや他人を乎！秦王の堅は反者を得る毎に輒ち之を宥し，其の臣をして逆を為すに^な狃ら^な使め，險を行いて幸いを徼え，力を屈くして擒とせ被れると雖も，猶ほ死を憂えず，亂は何に自りてか而して息まん哉！《書》（書經胤征の辭）に曰く、

「威は厥^その愛に克てば，允^{まこと}と濟る。愛は厥の威に克てば，允に功^な罔し。」

《詩》（詩經民勞の第三章の辭）に云う、

「詭隨を縦にする^な母^なく，以て罔極^{ぼうきよく}を謹ましむ。式て寇虐^{とど}を遏め，俾慝^{もつ}を作さしむ無かれ。」

今堅は之に違ふ，能く亡ぶる無からん乎！

■朝廷は秦兵之退くを以て謝安、桓沖之功と為し，安を衛將軍に拜し，沖と與に皆な開府儀同三司とす。

■六月，甲子（元嘉曆19日），大赦す。

■丁卯（元嘉曆22日），會稽王の道子を以て司徒と為す。固く譲りて拜せず。

【長安に鮮卑を残して氏を移す】

前秦 **【秦の大幅な人事配置換え】** 秦王の堅は陽平公の融を召して侍中、中書監、都督中外諸軍事、車騎大將軍、司隸校尉、錄尚書事と為す。征南大將軍、守尚書令の長樂公の丕を以て都督關東諸軍事、征東大將軍、冀州牧と為す。堅は諸氏の種類が繁滋するを以て，秋，七月，三原、九嵎（陝西省關中道醴泉県、現・咸陽市礼泉県）、武都、汧、雍の氏十五萬戸を分けて，諸々の宗親をして各々之を領せしめ，方鎮に散居すること，古の諸侯の如し。長樂公の丕は氏三千戸を領し，仇池氏曾の射聲校尉の楊膺を以て征東左司馬と為し，九嵎氏曾の長水校尉の齊午を右司馬と為し，各々一千五百戸を領せしめ，(6-245p) 長樂の世卿と為す。長樂國（続は為し）の郎中令の略陽の垣敞を錄事參軍と為し，侍講の扶風の韋干（続は乾）を參軍事と為し，申紹を別駕と為す。膺は，丕之妃の兄也。午は，膺之妻の父也。八月，幽州を分けて平州（遼東・昌黎・玄菟・帶方等五郡）を置き，石越を以て平州刺史と為し，龍城（現・遼寧省朝陽市）に鎮ぜしむ。中書令の梁鸞を幽州刺史と為し，薊城（現・北京市）に鎮ぜしむ。撫軍將軍の毛興を都督河、秦二州諸軍事、河州刺史と為し，枹罕に鎮ぜしむ。長水校尉の王騰を并州刺史と為し，晉陽に鎮ぜしむ。河、并二州は各々氏戸三千を配す。興、騰は並（続は竝）に苻氏の婚姻，氏之崇望（名望み高い）也。平原公の暉を都督豫、洛、荊、南兗、東豫、揚六州諸軍事、鎮東大將軍、豫州牧と為し，洛陽に鎮ぜしむ。洛州刺史を移して豐陽（陝西省關中道商県現・商洛市商州区）に治す。巨鹿公の睿を以て雍州刺史と為し，蒲阪に鎮ぜしむ。各々氏戸三千二百を配す。

前秦 堅は丕を送りて灊上に至り，諸氏は其の父兄と別れ，皆な慟哭し，路人を哀感す。趙整は侍宴に因り，琴を援^とりて而して歌って曰く、

「阿得脂（???），阿得脂，博勞（百舌鳥類）の舅父は是れ仇綏（???），尾長くして翼は短く飛ぶ能わず。遠く種人（諸々の氏）を徙して鮮卑を留める，一旦緩急あれば當に誰に語るべきや！」（氏族を分けて、鮮卑を都に残すことの不安を指摘、趙整は数々苻堅に直言し、死後商に隠遁して「南」を表す）

堅は笑い而して納れず。

■九月，癸未（元嘉曆10日），皇后の王氏は崩ず。

■冬，十月，九真太守の李遜は交州に據りて反す。

前秦 秦王の堅は左禁將軍の楊壁を以て秦州刺史と為し，尚書の趙遷を洛州刺史と為し，南巴校尉（南中に

置く)の姜宇を寧州刺史と為す。

■十一月，乙酉（元嘉曆13日），定皇后（王皇后の諡）を隆平陵に葬す。

前秦十二月，秦は左將軍の都貴を以て荊州刺史と為し，彭城（続によれば襄陽の誤り）に鎮ぜしむ。

前秦東豫州を置き，毛當を以て刺史と為し，許昌に鎮ぜしむ。

■前秦是の歲，秦王の堅は高密太守の毛瑨之（前卷四年に捕虜の記事あり）等二百餘人を遣りて來たり歸さしむ。
（捕虜の送還）

烈宗孝武皇帝上之中太元六年（辛巳，381年）

■[初めて佛法を朝廷に入れる]春，正月，帝は初めて佛法を奉じ，精舍（精を専らにして業とする所を講習する舎の意味。儒釋、肄業を肄うの地、通じて精舎という）を殿内に立て，諸々の沙門を引いて之に居らしむ。尚書左丞の王雅は表して諫すれども，從わず。雅は，肅（王肅は曹魏に仕え經學を以て名を著す）之曾孫也。

■丁酉（元嘉曆26日），尚書の謝石を以て僕射と為す。

前秦二月，東夷，西域六十二國は秦に入貢す。（当然倭國も朝貢している可能性有り）

■夏，六月，庚子（元嘉曆1日で一致）朔，日之を食する有り。

■秋，七月，甲午（25日），交趾太守の杜瑗は李遜を斬り，交州は平らぐ。（6-246p）

■冬，十月，故の武陵王の晞は新安（前卷簡文帝咸安元年に移る）にて卒し，新寧郡王に追封し，其の子の遵に命じて嗣と為らしむ。

■十一月，己亥（32日?），前の會稽内史の郗愔を以て司空と為す。愔は固辭して起たず。

前秦■[秦は竟陵に侵攻するも、桓石虔らが撃退]秦の荊州刺史の都貴は其の司馬の閭振、中兵參軍の吳仲を遣わして衆二萬を帥いて竟陵（湖北省襄陽道鍾祥縣、現・荊門市鍾祥市）を寇し，桓沖は南平太守の桓石虔、衛軍參軍の桓石民等を遣わして水陸二萬を帥いて之を拒む。石民は，石虔之弟也。十二月，甲辰（8日），石虔は振、仲を襲撃し，大いに之を破り，振、仲は退きて管城（湖北省襄陽道鍾祥縣の激水の北、現・荊門市鍾祥市か）を保つ。石虔は進みて之を攻ち，癸亥（27日），管城を抜き，振、仲を獲り，斬首は七千級，俘虜は萬人。詔して桓沖の子の謙を封じて宜陽侯と為し，桓石虔を以て河東太守を領せしむ。

■是の歲，江東は大いに饑える。

烈宗孝武皇帝上之中太元七年（壬午，382年）

前秦[東海公の陽の謀反あらわる、また許す]春，三月，秦の大司農の東海公の陽、員外散騎侍郎の王皮、尚書郎の周虓は反を謀り，事は覺われ，收めて廷尉に下す。陽は，法之子、皮は，猛之子也。秦王の堅は其の反狀を問ひ，陽は曰く、

「臣の父の哀公（苻法、死するは100卷穆帝升平元年にあり）は死するに罪を以てせず，臣は父の為に仇（続は讐）を復する耳。」

堅は泣いて曰く、

「哀公之死は，事は朕に在らず，卿は豈に之を知らざるや！」

王皮は曰く、

「臣の父丞相は、佐命之勳有り、而るに臣は貧賤を免かれず、故に富貴を圖らんと欲する耳。」

堅は曰く、

「丞相は終わりに望みて卿を托するに、十具の牛を以て田を治める之資と為さんとし、未だ嘗て卿の為に官を求めず。子を知るは父に若くは莫し、何ぞ其れ明らかなる也！」

周虓は曰く、

「虓は世々晉の恩を荷ない、生きては晉の臣と為り、死しては(続により補充)晉の鬼と為らん、復た何ぞ問わん乎！」

是より先、虓は屢々反叛を謀り、左右は皆な之を殺すを請う。堅は曰く、

「孟威は烈士なり、志を乗ること此くの如し、豈に死を憚らん乎！之を殺せば適々其の名を成すに足る耳！」

皆な赦して、誅せず、陽を涼州之高昌郡に、皮、虓を朔方之北に徙す。虓は朔方に卒す。陽は勇力は人を兼ねる、尋いで復た鄯善に徙す。建元之末に及びて、秦國は大いに亂れ、陽は鄯善之相を劫^{おびやか}し、東歸を求めんと欲す、鄯善王は之を殺す。

前秦秦王の堅は鄴の銅駝、銅馬、飛廉、翁仲を長安に徙す。(石虎が鄴に置くもの)

前秦【苻堅はまた南寇を謀らんとす】夏，四月，堅は扶風太守の王永を幽州刺史と為す。永は、皮之兄也。皮は凶險にして行ふ無けれど、而して永は清修にして學を好む、故に堅は之を用いる。陽平公の融を以て司徒と為し、融は固辭して受けず。堅は方に晉を伐たんと謀り、乃ち融を以て征南大將軍、開府儀同三司と為す。

前秦五月，幽州は蝗（イナゴの被害）を生じ、廣袤（広は東西の、袤は南北の長さ）千里。秦王の堅は散騎常侍の彭城の劉蘭をして幽、冀、青、并の民を發して之を撲除せしむ。

■秋，八月，癸卯（11日），大赦す。(6-247p)

前秦秦王の堅は諫方大夫の裴元略を以て巴西、樟潼二郡太守と為し、密に舟師を具え使む。(王濬の故智を祖として流れに順い東に下りて晉を伐たんとする)

前秦【車師前部王、鄯善王は秦に西域討伐を求める、呂光派遣】九月，車師前部王の彌寔、鄯善王の休密駄は秦に入朝し、

「請う郷導を為し、以て西域之服せざる者を伐ち、因りて漢の法の如く都護を置き以て之を統理せん。」秦王の堅は驍騎將軍の呂光を以て使持節、都督西域征討諸軍事と為し、凌江將軍の姜飛、輕車將軍の彭晃、將軍の杜進、康盛等と與に兵十萬、鐵騎五千を總べて、以て西域を伐たしむ。陽平公の融は諫めて曰く、

「西域は荒遠にして、其の民を得るとも使う可からず、其の地を得るとも食す可からず、漢の武は之を征し、得て失うを補わず。今師を萬里之外に勞し、以て漢氏之過ちたる舉を踵むは、臣は竊に之を惜しむ。」聽かず。

■桓沖は揚威將軍の朱綽をして秦の荊州刺史の都貴を襄陽に撃た使め、沔北の屯田を焚踐（晉書本紀、桓彝傳には焚燒）し、六百餘戸を掠め而して還る。

【苻堅は大反対の中、南征をはかる】

前秦【苻堅は南進の意見を群臣に求める】冬，十月，秦王の堅は群臣を太極殿に會して、議して曰く、

「吾は業を承けてより、三十載（苻堅は升平元年に自立して26年）に垂々とし、四方は略定まり、唯だ東南の一隅（東晋）は、未だ王化に沾（うるお）（ほぼ）わす。今略吾が士卒を計るに、九十七萬を得る可し、吾は自ら將いて以て之を討たんと欲す、何如や？」

秘書監の朱彤は曰く、

「陛下は恭しく天罰を行う、必ず征する有りて戦う無し。晉主は壁を軍門に衝まざれば（降伏するをいう）、則ち江海に死せん。陛下は（続により補充）中國の士民（永嘉の末に乱を避けて南渡する者の子孫）を返し、其の桑梓（故郷）を復さしめ、然る後に輿を回して東巡し、成を岱宗（太山）に告げんは、此れ千載一時也！」

堅は喜んで曰く、

「是れ吾が志也。」

尚書左僕射の權翼は曰く、

「昔紂は無道を為し、三仁（微子・箕子・比干。武王は位について九年、紂を伐つべしと諸侯は言うも二年待ち、比干は殺され、箕子は囚われ、微子は周に走り、ようやく立つ）朝に在り、武王は猶ほ之が為に師を旋す。今晋は微弱と雖も、未だ大惡有らず。謝安、桓沖は皆な江表の偉人にして、君臣は輯睦し、内外は同心す。臣は以て之を觀るに、未だ圖る可からざる也。」

堅は嘿然として良く久しく、曰く、

「諸君は各々其の志を言え。」

太子の左衛率の石越は曰く、

「今歲（木星）鎮（土星）は門を守り、福德は吳に在り。之を伐てば、必ず天殃有らん。且つ彼は長江之險に據り、民は之が用を為す、殆ど未だ伐つ可からざる也！」

堅は曰く、

「昔武王の紂を伐つや、歲に逆いトに違ふ。天道は幽遠にして、未だ知る可きは易からず。夫差、孫皓は皆な江湖に保據するも、亡びるを免かれず。今吾之衆を以て、（6-248p）鞭を江に投げ、其の流れを斷つに足り、又た何の險か之を恃むに足りる乎！」

對えて曰く、

「三國之君（紂・夫差・孫皓）は皆な淫虐無道にして、故に敵國は之を取る、遺ちたるを拾うより易し。今晋は德無しと雖も、未だ大罪有らず、願はくは陛下は且く兵を案じ穀を積み、以て其の釁を待つべし。」是に於いて群臣は各々利害を言い、之れ久しく決せず。堅は曰く、

「此れは所謂室（いむゆる）（続は舎）を道旁に築けば、時として成る可き無し（道端に家を建てれば、往来の者があれこれ言つて、聞けば何時までも出来ない）。吾は當に内心に斷すべき耳！」

前秦 **〔陽平公の融も出陣を諫める〕** 群臣は皆な出で、獨り陽平公の融を留めて、之に謂つて曰く、

「古より大事を定める者は、一二臣に過ぎず而して已む。今衆は紛紛と言いて、徒らに人の意を亂す、吾は當に汝と之を決せん。」

對えて曰く、

「今晋を伐つには三難有り。天道は順わず、一也。晋國は釁無し、二也。我は數々戦いて兵は疲れ、民は敵を畏れる之心有り、三也。群臣は晋は伐つ可からざる者と言う、皆な忠臣也、願はくは陛下は之を聽くべし。」

堅は色を作して曰く、

「汝も亦た此くの如し、吾は復た何を望まん！吾は強兵百萬、資仗は山の如し。吾は未だ令主為らざると雖も、亦た暗劣に非ず。累りに捷つ之勢に乗りて、垂亡之國を撃つは、何ぞ克たざるを患えん、豈に復た此の殘寇を留め、長く國家之憂いと為ら使む可けん哉！」

融は泣いて曰く、

「晉は未だ滅す可からずは、昭然として甚だ明らかなり。今師を勞して大舉すれば、恐らくは萬全之功無し。且つ臣之憂うる所は、此に止まらず。陛下は鮮卑、羌、羯を寵育し、畿甸（王城付近）に佈滿す、此の屬は皆な我之深仇なり。太子は獨り弱卒數萬と與に京師を留守すれば、臣は懼る不虞之變生が腹心の肘掖に生ずる有らんことを、悔いる可からざる也。臣之頑愚なるは、誠に采るに足らず。王景略（王猛）は一時の英傑、陛下は常に之を諸葛武侯に比し、獨り其の没するに臨む之言（前卷寧康三年に見える）を記さず乎！」

堅は聽かず。是に於いて朝臣は進みて諫する者は衆く、堅は曰く、

「吾を以て晉を撃つは、其の強弱之勢を校るに、猶ほ疾風之秋葉を掃うがごとし、而るに朝廷の内外は皆な可からずを言う、誠に吾が解せざる所也！」

前秦〔太子の宏も諫める、慕容垂は扇動〕太子の宏は曰く、

「今歲（木星）は吳の分に在り、又た晉君に罪は無く、若し大舉して捷たざれば、恐らくは威名は外に挫き、財力は内に竭き、此れ群下の疑う所以也！」

堅は曰く、

「昔吾は燕を滅し、亦た歲を犯して而して捷ち、天道は固に知り難き也。秦は六國を滅ぼすも、六國之君は豈に皆な暴虐なる乎！」

冠軍（將軍）、京兆尹の慕容垂は堅に言つて曰く、

「弱きは強きに並（続は併）せられ、小は大に並せられるは、此れは理勢は自ら然り、知り難きに非ざる也。陛下の神武は期に應じ、威は海外に加わり、虎旅は百萬、韓、白（漢の韓信、秦の白起などの名將）は朝に滿つるを以て、而もさいじ蕞爾（小さく取るに足らない）たる江南のみ、獨り王命に違ひ、豈に復た之を留めて以て子孫に遺す可けん哉！（6-249p）《詩》（小雅小旻の辭）に云う、『謀夫孔はなはだ多く、是を用いて集らず。』（謀る人が多い手決まらず、出来ない）陛下は聖心より斷ずれば足る矣、何の必ずしも廣く朝衆に詢らん！晉武は吳を平らげるや、仗る所の者は張、杜（張華・杜豫）二三臣而して已む、若し朝衆之言に従えば、豈に混壹之功有らん乎！」堅は大いに悦び、曰く、

「吾と共に天下を定める者は、獨り卿而して已む。」

賜わるに帛五百匹をもつてす。

前秦〔陽平公の融は再び諫める〕堅の銳意は江東を取らんと欲し、寝ねるも旦なる能わず。（寝ても朝まで眠れず）陽平公の融は諫めて曰く、

「『足るを知れば辱かしめられず、止まるを知れば殆うからず。（老子の言）』古より兵を窮め武を極めれば、未だ亡びざる者有らず。且つ國家は本は戎狄也、正朔は會かならず人に歸せず。江東は微弱にして僅かに存すると雖も、然れども中華の正統にして、天意は必ず之を絶たず。」

堅は曰く、

「帝王の歷數は、豈に常に有る邪！惟だ德之在る所耳！劉禪は豈に漢之苗裔に非ざる邪、終に魏の滅ぼす所と為る。汝が吾に如かざる所以者、正に此の變通に達せざるを病む耳！」

前秦〔僧の道安も諫める〕堅は素より沙門の道安を信重し、群臣は道安をして間に乘じて進言せ使む。

十一月、堅は道安と輦を同じくして東苑に遊び、堅は曰く、

「朕は將に公と南に吳、越に遊び、長江に泛かび、滄海に臨まんとする、亦た楽しからず乎！」

安は曰く、

「陛下は天に應じ世に御し、中土に居りて而して四維を制す、自ら隆を堯、舜に比すに足る、何をか必ず櫛風沐雨（風雨にさらされながら、苦勞して働く）して、遐方を經略せん乎！且つ東南は卑濕（ひしゅう（じめじめ））にして、沴氣（人を傷つく惡氣）は構え易く、虞舜（南に巡狩して蒼梧の野に崩ずる）は遊びて而して歸らず、大禹（東に巡狩して会稽に崩ず）は往きて而して復さず。何の以て上大駕を勞するに足る也！」

堅は曰く、

「天は烝民を生じ、而して之が君を樹て、之を司牧せ使む、朕は豈に敢えて勞を憚り、彼の一方をして獨り澤を被らざら使めん乎！必ず公の言の如くならば、是れ古之帝王は皆な征伐無からん也！」

道安は曰く、

「必ず已むを得ずば、陛下は宜しく蹕を洛陽に駐め、使者を遣わして尺書を前に奉ぜしめ、諸將をして六師を後に總べしめれば、彼は必ず稽首して入りて臣たらん、必ず親ら江、淮を渉らざるべき也。」

堅は聽かず。

前案「寵妃、寵子も諫めるも聞かず」堅の幸する所の張夫人は諫めて曰く、

「妾は聞く天地之萬物を生じる、聖王之天下を治める、皆な其の自然に因りて而して之に順う、故に功は成らざる無し。是を以て黃帝の牛を服し馬に乗るは、其の性に因る也。禹（東に巡狩して会稽に至りて崩ず）は九川を浚し、九澤を障（堤防）するは、其の勢いに因る也。后稷（伝説上の周王朝の姬姓の祖先。中国の農業の神）の百穀を播殖するは、其の時に因る也。湯、武天下を帥いて而して桀、紂を攻めるは、其の心に因る也（人心に因りて兵を用いる）。皆な因有れば則ち成り、因無ければ則ち敗れる。今朝野之人は皆な晉を伐つ可からずを言うに、陛下は獨り決意して之を行う、妾は陛下の何くの所に因るかを知らざる也。《書》（皐陶謨の辭）に曰く、『天の聰明は我が民の聰明による。』天も猶ほ民に因り、而して況んや人を乎！妾は又た聞く王者の師を出だすや、必ず上は天道を觀、下は人心に順う。今人心は既に然らず矣、請う之を天道に驗せん。諺に云う、『雞の夜鳴く者は師を行うに利あらず、犬の群が噪える者は宮室は將に空しくせんとし、（6-250p）兵動けば馬は驚き、軍敗れて歸らず。』秋、冬より以來、衆雞は夜鳴き、群犬は哀しく噪え、廐馬は多く驚き、武庫の兵器は自ら動きて聲有り、此れ皆な師を出だす之祥に非ざる也。」

堅は曰く、

「軍旅之事は、婦人の當に預かる所に非らざる也！」

堅の幼子の中山公の詵は最も寵有り、亦た諫めて曰く、

「臣は聞く國之興亡は、賢人之用捨に系わる。今陽平公は、國之謀主なり、而して陛下は之に違ふ。晉には謝安、桓沖有り、而して陛下が之を伐てば、臣は竊に之に惑う。」

堅は曰く、

「天下の大事は、孺子の安んぞ知らん！」

前案秦の劉蘭は蝗を討ち、秋冬を経れども滅する能わず。十二月、有司は奏して請う、

「蘭を徵して廷尉に下さん。」

秦王の堅は曰く、

「災降るは天よりなり、人力の能く除く所に非ず、此れは朕之失政に由り、蘭に何の罪ある乎？」

是の歳、秦は大いに熟し、上田は畝に七十石を収め、下者三十石、蝗は幽州の境を出ず、麻豆を食わず、上田は畝に百石を収め、下者五十石なり。(異様なるほどの報告は、衰亡の前兆という意味の記述)

(原文は資治通鑑 Wikipedia から「維基文庫」を利用、元代の胡三省の注釈入りは同ホームページの「四庫全書本」に掲載。文中では、眾→衆、後→后に修正)

令和 2 年 10 月 10 日 原文 11687 文字

令和 2 年 10 月 26 日 完訳開始 23134 文字

令和 3 年 12 月 14 日 書下し 23814 文字